

パネル「肉牛の飼育過程（黒毛和種の場合）」の解説

家畜の繁殖について

畜産でもっとも基本的で大切なことは、何でしょうか。

それは、どの畜種でも大切なことです。

答えは、家畜に健康でよい子をたくさん産んでもらうことです。畜産では、「繁殖」という言葉を使います。

繁殖は、家畜によって違いがあります。

それは1年中いつでも子を産むことができる動物と、季節によって子を産む動物がいるということです。

身近な家畜には、牛、豚、馬、ニワトリなどがいますが、繁殖のようすは動物によって異なります。

哺乳類の家畜の雌は、妊娠できる体の準備が整い、雄を受け入れられる状態とそれを雄に知らせる状態、これを「発情」と言いますが、この時だけ、雄を受け入れます。

牛や豚は、妊娠していない時は、1年中周期的に発情を繰り返します。つまり年中いつでも妊娠することが可能な家畜です。

一方、馬やヒツジ、ヤギは特定の季節だけに発情します。馬の妊娠期間は、約340日、ヒツジやヤギは約150日です。いずれも子が産まれる季節が春になるように、馬では春に、ヒツジやヤギは秋に繁殖期を迎えるようになっています。

少し見方を変えてみると、いつでも子どもを産める牛や豚は、畜産業に向いているとも言えるでしょう。

繁殖部門と肥育部門

肉牛を飼っている農家は、牛の飼い方で区分されます。

また、飼っている牛の種類によって、区分されることもあります。

ここでは、牛の飼い方に注目して、農家でどんなふうに牛が飼われているか、見てみましょう。

パネルに示すように、肉牛の飼い方は、「繁殖」と「肥育」に区別されます。

繁殖だけを行う農家を繁殖農家（または、繁殖経営）、肥育だけを行う農家を肥育農家（または、肥育経営）と言います。

この両方を行う農家を、繁殖肥育一貫農家（または、繁殖肥育一貫経営）と言います。

三重県では、繁殖部門だけを行う農家はほとんどなく、肥育経営が多くなっています。

平成17年の統計数値によれば、三重県の肉用牛経営農家戸数は281戸です。経営の一部で繁殖に取り組む農家戸数は34戸となっています。

繁殖牛

母牛から生まれて、繁殖用として飼育されている雌牛は、生後14ヶ月ほどで、初回

の発情が現れます。

牛の妊娠期間は、約 280 日です。

母牛は、子牛を産んだ後、子牛を育てながら、次の分娩のために分娩後概ね 80 日前後で種付けをします。

繁殖経営では、効率よく子牛が生まれないと経営が成り立ちません。分娩後種付けまでの 80 日間と 280 日間の妊娠期間を足すと 360 日になります。繁殖農家は 1 頭の母牛が 1 年間に 1 産できることを目標にして、経営を続けています。

このように母牛は、種付け 分娩 種付け 分娩・・・を、繰り返します。繁殖牛には一生のうちに、少なくとも数回以上分娩できることが求められます。

牛の中には、病気になって順調に分娩ができなかったり、お産に失敗したりして死亡したりする牛もいますが、このような牛は、農家にとっては、損失につながります。

母牛の中には、生涯のうちに 10 産以上も分娩するような牛もいます。

子牛

生まれた子牛には、たくさんの初乳を与えます。生まれて 1 週間程度の子牛は 1 日に 7kg 程度のお乳を飲みます。初乳はいろいろな病気に対する免疫物質を含んでいるので、大変大切なものです。

子牛が母牛の乳だけで育つのは 30 日齢頃までで、20 日齢を過ぎる頃になると、母牛のエサに興味を示してきます。

この頃から、子牛用にエサを与え始めます。濃厚飼料（穀類の飼料）も与えられますが、その後の発育のためには、丈夫な「胃」が必要なことから、粗飼料（牧草などの飼料）も給与されます。

飼育方法にもよりますが、生後 5 ヶ月から 6 ヶ月間は、母牛といっしょに飼育されます。

子牛が雌の場合は、次の母牛になるために、農家にそのまま残されて飼育されることもあります。ほとんどの子牛はおよそ 10 ヶ月齢から 12 ヶ月齢になる頃に、肥育農家に向けて販売されます。実際には、その農家の近くの市場に出荷され、セリにかけられて販売されます。

さて、子牛はどれくらいのスピードで大きくなるのでしょうか。

黒毛和種（和牛）を例に取ってみましょう。

生まれたての子牛の体重は約 30kg です。子牛市場に出荷される生後 10 ヶ月齢から 12 ヶ月齢の体重は、雌と雄で差がありますが、250kg から 300kg になります。計算をしてみると、子牛の体重はこの時期、平均で毎日 0.7kg から 0.8kg 程度増えていることになります。もっと発育スピードの速いものもいます。（子牛の出荷月齢は、10 ヶ月齢未満の場合が多くなってきています。）

肥育経営

肥育農家の仕事は、子牛を市場で購入し、大きく肥らせて肉牛として出荷することです。

遠い地方で購入した子牛は、輸送の疲れもあって肥育農家に着いたときには、20kg前後もやせてしまっています。

肥育農家では、この体重の減少を元に戻すことから始めます。

飼育をどれくらいの期間するのか、どんな肉を生産したいのか等で、いろいろな飼育方法があるので一概には言えませんが、肥育経営では、牛を概ね20ヶ月間肥育します。

この間に給与する飼料を基準にして肥育期間を区分すると、前期の7ヶ月、中期の7ヶ月、残りの6ヶ月（仕上期または後期）という具合に分けられます。

それぞれの時期に与えられる飼料には、次のような意味があります。

前期は、子牛の内臓（特に胃）と骨格の成長に気をつける時期です。良質の粗飼料を給与します。

中期から後期にかけては、筋肉の中に脂肪をつける時期に当たります。トウモロコシや大麦などカロリーの高い濃厚飼料を給与します。飼料の配合割合は、牛の能力を生かすように飼料会社や農家が試行錯誤しています。

飼料の配合割合も重要なポイントですが、牛が食欲不振にならないように畜舎の環境（温度、湿度、風とおしなど）に注意したり、ストレスを与えないように細心の注意を払いながら飼育します。

ストレスは、牛同士が角で突きあったりすることでも発生します。多くの場合、牛は数頭をひとつのグループとしてひとつのマス（牛房：ぎゅうぼう）の中で飼育されます。牛にも強い牛と弱い牛がいるので、いわゆるいじめのような行動をすることがあります。角は牛にとって武器のひとつでもあるので、こういったことがないように事前に角を切ったりすることもあります。

約20ヶ月の肥育期間を過ぎると、出荷を迎えます。

生まれてから28ヶ月～30ヶ月で出荷される時の体重は、これも性別や飼育の方法で異なりますが、630kg～730kgほどになります。

肥育全期間の通算の飼料給与量を、日数で割ってみると、1日に食べる濃厚飼料の量は6kg～7kg、粗飼料の量は1.6kg程度になります。

* パネル内、文中の数値等は平均的なものであり、飼育方法等により異なります。